

平成28年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT28167 (静岡大学)

書道を科学しよう！～文字の表現力～



開催日: 平成28年8月8日(月)

実施機関: 静岡大学

(実施場所) 教育学部A棟601室、612室

実施代表者: 杉崎 哲子

(所属・職名) 教育学部・教授

受講生: 高校生9名、中学生8名

関連URL: <http://shobunka.com/hirameki2016>

【実施内容】

<目的>

文字の表現力といった場合、硬筆よりも毛筆の方が豊かである。しかし参加者の、特に中学生にしてみると、「毛筆書」の制作は書写学習での経験しかなく、それは「規範文字」にどれだけ近づけるかといった極めて窮屈なものであつただろう。そこで今回は、毛筆書の表現の基盤にある「線質」の理解を目的に、「にじみ」や「かすれ」、墨色による印象の違いに着目して体感するとともに、筆圧測定で「抑揚」を意識し、後半の書制作に生かせるよう配慮した。

<本プログラム実施における注意点>

事前アンケートを実施して書道の経験年数を把握したところ開きがあり、理解度にも個人差があることが予測されたため、技術や経験によらない体験的な内容をワークショップに組み入れた。書写的な学習内容の確認は、講義中にゲーム形式で行うよう配慮した。さらに数種の体験を「表現力」をキーワードにしてまとめるワークシートを配布し、総合的な理解に結び付けた。

ワークショップでは、実施協力者である本学の書文化専攻生らが解説を引き受けてくれ、また作品制作の際にも、墨量や筆の選択などをアドバイスしてくれた。淡墨を扱うため、誤って濃墨をつけた筆を使う等の混合を避け、別の部屋を淡墨制作ように準備しておいた。全員が、墨色やにじみ、かすれを楽しみながら、線質に拘って書いていた。

発表の際には、大学生らと楽しみながら交流できるよう、サロン形式にして環境を整えた。

<安全配慮について>

大学事務局より熱中症および脱水症状への対処を強く求められたため、事前にスポーツ飲料や緑茶などの飲物や、熱中症防止用の飴などを十分に準備した。昼食は業者に会場まで届けてもらうようにして衛生面に配慮した。休憩時には参加者が自由に気遣いなく休めるように配慮したので、校内を適度に移動し気分転換していた。お陰で、特に調子を崩す者もいなかった。

<発展性と課題>

従来のような平面的な動きの提示に留まらず、三次元的に動きをとらえられるよう配慮し、「動き」として意識させる手立ては効果的であつた。書道を科学して研究できる大学は本校において他にないので、今後も継続していきたいと考えている。しかし、以前、学外施設との共同事業への協力を広く他専攻の学生に呼びかけたときも、書文化生以外の参加はなかった。今年度から書文化専攻が募集停止になったので、協力してくれる学生の確保が最大の課題である。

<実施の様子>

平成28年8月8日（月）、大谷キャンパス教育学部 A601「書道実習室」において、中高生17名の参加を得て実施した。JSPS 学術システム研究センターから、人文学専門調査班の専門研究委員、伊藤徹先生と研究事業部研究助成第二課の藪野様をご同席くださった。

〔開講式〕〔科研費と本事業の説明〕

はじめに、JSPS 学術システム研究センター、人文学専門調査班の専門研究委員、伊藤徹先生から科研費と本事業について、ご説明いただいた。

〔ワークショップ=実習 I〕

5～6名1組に3グループに分かれて、数種のワークショップを行った。

○毛筆による「表現」の幅を知ろう。

A. 墨色を味わう／固形墨を使い、「墨色」について、膠（にかわ）の配合具合による違いや茶墨と青墨の色合いを確かめ、立体的な線も味わってもらった。



A

B. 「にじみとかすれ」／超濃墨と普通の液体墨とを比較し、書の線で重要な「気脈」や透明感のある「かすれ」等、「線質」について考えてもらった。書写では、滲まないように墨の量に気をつけ、一画一画、穂先を整えてかすれないように書くことが多いため、特に中学生にとっては、新鮮だったようである。



B

C. 線質／次のワークショップでは、四つの古典の「年」の特徴を確認し、大学生から、その用筆法を教わって、5画目の横画を書き分けることに挑戦してもらった。古典の特徴を生かして書くためには、入筆の仕方や送筆、筆の抜き方や収め方を意識し筆圧を感じて書く必要がある。このことを次のワークショップで確かめられるようにした。



C

○筆圧を意識しよう。



実施協力者である滝本氏にご協力いただき、機器を用いた「筆圧測定」によって、自分の筆圧を自覚することができ、視覚的な認識と手指の運動との両面から「表現」に生かせるヒントを伝えることができた。筆圧を感じやすいよう、万年筆でも筆記してもらったが、ほとんどの参

加者が、はじめて万年筆を使用するとのことであった。

〔講義〕――講師／杉崎哲子（実施代表者）

「美文字を書くポイント」をクイズ形式で確認し、ワンランクアップの技として錯視をふまえた美文字の書き方のコツを伝えたり、筆記具の持ち方と筆圧との関係について説明をしたりして、ワークショップの内容を総合的にとらえられるよう工夫した。

（昼食・休憩／校内の立ち入り可能な場所を案内したので、友達と一緒に自由に移動して気分転換し、午後



の制作について構想を練っていた。)

〔実習Ⅱ＝「ダイジ」な力（大字書の制作）〕

午後は、各自が大学生にアドバイスをもらいながら、自分なりの表現を楽しんで大字書を制作した。淡墨を使って墨色の重なりを楽しむもの、濃墨によるかすれに拘るものなど、それぞれが、ワークショップや講義の内容を生かして制作していた。



〔発表会・サロン〕

グループごとに「題材設定の理由」や「表現の工夫」を発表し合い、各グループから2名ずつ全体でも発表した。大学生に教わりながら初めて隷書に挑戦したという高校生、淡墨による線の重なりを楽しんだという声も多かった。特に中学生は、穂先を整えて書いく書写と違う、生き生きとした線の魅力を存分に楽しんでいた。どの作品も生き生きとした線が魅力的で、笑顔いっぱいの発表会になった。



最後に、伊藤先生による「美」についてのご講義を拝聴した。即時的に役に立つとか効果が明確なものに価値を見出すことの多い昨今において、書文化の継承は難しくなっているように思えるが、今後も、意識的にこのような場を提供し大事にしていかなければならないと痛感した。



〔閉講（修了）式〕

「未来博士号」の修了書を一人一人に授与し、全員で記念写真を撮って、予定通り、16時に閉会した。

〔スケジュール〕

- 8:30- 9:00 受付
- 9:00- 9:10 開講式
- 9:10- 9:20 科研費と
本事業の説明
- 9:20- 9:30 自己紹介
- 9:30-10:50 実習Ⅰ
- 11:00-12:00 講義
- 12:00-12:40 昼食
- 12:40-14:10 実習Ⅱ・「ダイジ」な力
- 14:20-15:20 サロン（発表会とクッキータイム）適宜休憩
- 15:20-15:30 「美」話
- 15:30-16:00 修了式



（未来博士号授与、色紙記念揮毫、記念撮影）、アンケート記入、解散

【実施分担者】 なし

【実施協力者】 9名(学外:2名、学外:7名)

【事務担当者】 石川 和史 研究協力課研究協力係長